

# 他者の現象学

## —ブルーストを読むサルトル

澤田直

はじめに

ドゥルーズやベンヤミンの例を挙げるまでもなく、ブルーストは、多くの哲学者や思想家によつて考察の対象となつてきた。本稿では、現象学との関係、特にサルトルを中心に見ていきたい。はじめにごく簡略に、ブルーストに対するサルトルの立ち位置を紹介しておこう。文学研究者の多くは、サルトルを、まずはブルースト批判者として思い描くことであろう。じつさい、アンガージュマン文学を語るときのサルトルは、その文脈でブルーストをブルジョワ作家として厳しく弾劾した。なかでもよく知られた例は、一九四五年に『現代』誌を創刊した際の「創刊の辞」である。

ブルーストはブルジョワであることを選択した。彼は、ブルジョワのプロパガンダの共犯者となつた。というのも、彼の作品は人間本性という神話を広めることに貢献したからだ。我々は、ブルーストの主知主義的心理学をものはや信じてないし、そのような心理学は有害なものだと思う！。

ブルーストは歴史的条件や階級の対立などから目を背け、人間の普遍性を素朴に信じる、分析的精神に忠実なブルジョワ文学の代表者とされているのだ。だが、この批判は、多分に戦略的なものであり、『文学とは何か』におけるシュルレアリスム攻撃の場合と同様、かなり割り引いて考える必要がある<sup>2</sup>。さらに言えば、サルトルのブルースト批判はそもそも、戦前のサルトル自身のブルジョア的態度に対する自己批判的な部分も

含んでおり、この発言を額面どおりに受け取ることはとうていできないのである。

### 一 若き日のプルーストへの傾倒

サルトルが実存主義の旗手として、思想界と文壇に君臨する前に書いたテキストを見てみよう。一九四三年発表の哲学書『存在と無』の序論では、天才の例としてプルーストの名前が挙げられる。

現勢態の背後に、可能態<sup>ポテンティヤリテ</sup>力能や素質<sup>ヘクセス</sup>や徳があるわけではない。たとえば、天才——プルーストは「天才を持っていた」とか、彼は天才「であった」という意味で——という言葉の意味は、ある種の作品を創り出す特異な力能<sup>ポテンシヤス</sup>、それも創り出すことによって枯竭してしまふような力能のことではない。プルーストの天才とは、切り離されて捉えられた作品でも、創造する主体的な力でもない。それは、彼の人格のさまざまな現れの総体として捉えられた作品のことなのだ<sup>3</sup>。

大作家ならば、誰でもよいところで、なぜバルザックやスタンダール（サルトルの最愛の作家）ではなく、プルーストの名

を挙げるのか。その理由は、当時のプルーストの名声のみに求められるべきではなからう。じつさい、サルトルは青年時代にプルーストを愛読していたし、第一作『嘔吐』が『失われた時を求めて』の強い影響の下に書かれていることに關しては多くの研究書もある<sup>4</sup>。小説の最後で、主人公が作品を書くことを決意するという『嘔吐』の構成は、『失われた時を求めて』を想起させずにはおれないし、その他にも多くの類似点がある。しかし、これらの点については、すでに多くの研究が存在するから、これ以上は述べない。ここでは、サルトルの専門家以外には、あまりよく知られていない若き日のサルトルの手帖を紹介しておこう。青年期作品集 (*Ecrits de jeunesse*) に収録された、「カルネ・ミディ (Carnet Midy)」と呼ばれる手帖である。これはサルトルが一九二四年ごろ、つまり一九〇五年生まれのサルトルが二十才を目前に付けていた備忘録のようなものであるが、ここにはプルーストへの手放しの賛辞が見られる。

私はプルーストを偉大な作家として愛するのみならず、強壯剤、刺激物としても愛するのだ。私は彼の誤りに対して寛容だし、それを愛しもある。動詞が抜けている文章や稚拙さに出会うと、作品の大きいなる美しさを愛するときと同様に、それを愛する。あたかも人が愛する者のおくればや黒子<sup>ほくろ</sup>を愛するように。私にとつて、プルーストを読むことは常に、イニシエーションであった<sup>5</sup>。

この「カルネ・ミデイ」には、その他にも、モランの「マルセル・ブルーストへのオード」が書き写されていたり、『ゲルマントの方』からの抜き書きが五カ所ほどあったり、とブルーストへの傾倒ぶりが明らかに見てとれる。

サルトルがブルーストを読みはじめたのは、本人の回想によれば、一九二〇年ごろで、ポール・ニザンをはじめとする級友たちによって現代文学に眼を開かれた時期である<sup>6</sup>。したがって、それは『ゲルマントの方』『ソドムとゴモラ』の出版のころということになる。カルネには、『ソドムとゴモラ』Ⅲと『囚われの女』の名が挙げられているので、この手帖の執筆が編者のミシェル・シカールが指摘する二四年だとすれば、二三年に刊行された『囚われの女』刊行直後、二五年刊行の『逃げ去る女』の前に、このメモは書かれたと推定される。いずれにせよ、『失われた時を求めて』の最終巻『見出された時』が刊行された一九二七年は、サルトルが高等師範学校を修了するときであった。つまり、サルトルはリアルタイムでブルーストを読んだのである。むしろすでにその名声はゆるぎないものではあった。とはいえ、サルトルは古典としてのブルーストに接したわけではないし、『失われた時を求めて』も、現在のわれわれがイメージするような、構築された大伽藍としてサルトルに現れたわけではない。このことは、頭の片隅に留めておくべきことであるろう。もうひとつ、サルトルにとってのブルーストはなにより

も、恋愛におけるパッションを見事に描いた作家であった。このことは、次の引用からも見てとれよう。

ブルーストは恋愛に関して悲観的な考えを持っている（スワン／オデット、サン＝ルルー／ラシエル、シャルリュス／モレル、モレル／チョッキ仕立て女、ブルースト／ゲルマント公爵夫人、ブルースト／アルベルチース）。ブルーストにとって、恋愛とは、滑稽で残酷な情念であり、精神の構造を狂わすものだ。彼の偉大で驚くべき才能は、登場人物たちを發展させていくところにある。シャルリュスは、『花咲く乙女たちのかげに』で「女たらし」と紹介されてから、『囚われの女』まで發展していくのだが、それはまことに見事である<sup>7</sup>。

しかしながら、三〇年代になると、このような手放しの称賛は影を潜め、サルトルの態度に大きな変化が現れる。アメリカ文学やカフカを発見したサルトルにとって、ブルーストは小説を書く上での仮想敵となり、この態度がその後、晩年まで一貫して続くことになるからである<sup>8</sup>。

その点は追々見ていくとして、まずは、本稿を準備するに際して頭に浮かびつつも、触れることのできなかった点をいくつか指摘しておきたい。サルトルのコーパス全体に見え隠れするブルーストの影である。

たとえば、『自由への道』の主人公マチウの愛人の名が、マセル（女性）であることにさほど意味はないとしても、マチウが密かに共感を寄せる兄嫁の名前がオデットであることは単なる偶然だろうか。また、サルトルのヴェネチアへの心酔ぶりはプルーストとまったく無縁なのだろうか。ヴェネチアというサルトルらしからぬ場所の意味は問われるに値することであろう。あるいは、サルトルの小説における幽閉というテーマがある<sup>9</sup>。すでに短編「部屋」においても、閉じこもったままのカップルが描かれていたが、戯曲「出口なし」では、三人の男女がホテルの一室に似た地獄に閉じ込められる。そして、五九年の戯曲『アルトナの幽閉者』では、主人公フランツはみずから「囚われの男」となり、他者たちの視線に曝されることなく、それにもかかわらず、現前する不在者となる。こういった事象のうちには紛れもなくプルーストの影を見ることができるよう思われし、若き日のプルーストへの傾倒はサルトルに深い痕跡を残し、生涯を通じて残ったように思われるのだ。しかし本稿ではそれらを十分に展開する余裕はない。『存在と無』に描かれる、對他関係などの分析などに絞ることにしたい。

## 二 プルースト批判、心理学

まずは、三〇年代後半から始まる、プルースト批判の論点をまとめてみよう。サルトルは当初『失われた時を求めて』を自

伝的小説と捉えていたようだが、プルーストをもつばら心理描写の達人、人間心理の観察者として評価していた。しかし、この心理学的要素が、次第に批判され、否定的な形で捉えられることになる。それには二つの原因がある。ひとつは、サルトルがフッサールの現象学を通して、意識のあり方を根本的に捉え直したためであり、もうひとつは、アメリカ小説などによって、内面性よりは、外部から人物を描く手法へと転向していったためである。そして、この二つはじつは密接につながっていると  
言える。

「自我の超越」でサルトルは、私の自我も他者の自我と同様、意識の外にあることを指摘した。「エゴは形式的にも物質的にも意識のうちにはない。それは外部、世界のうちにあるのだ。それは、他者のエゴと同様、世界の一存在者である<sup>10</sup>」。この考え、すなわち、意識の住民であるような「私」などはないというのが、このテクストの重要な論点であるが、それは別の観点から言うと、意識の内面性 (intimite) の否定ということである。小説と哲学を通じて、サルトルが主張するのは、このフッサールから学んだ教え、すなわち、意識には内部がないということなのだ。だからこそ、「フッサールの現象学の根本的理念——志向性」と題された短文でサルトルは、プルーストを引き合いに出して言う。「いまや我々はプルーストから解放された。同時に『内的生』からも解放された<sup>11</sup>」と。

当時のサルトルにとって乗り越えるべき作家は、なによりも

ジイドとブルーストであったが、彼らは人間心理の機微を見事に描いた作家だったとサルトルは考える。後に、モーリヤック論で、サルトルが強調したように、作者は神のようにすべてを知っているのではなく、あくまでも外部から人物を描かねばならない、という小説技法の問題において、心理の問題は一方で現れる。作家が、そして語り手が神のように、主人公の心のうちを知り得ないのだとすれば、心の機微や決断の因果関係のごときものも、所詮は後付け的に説明されたものでしかない。作家は、むしろ、因果関係を欠いたかに見える登場人物たちの行動を説明することなく、あくまでも外面から描くのが好ましいとされるのである<sup>12</sup>。

だが、問題はきわめて哲学的でもある。人間の心理、特に感情などをどのように捉えることができるだろうか、という問いが、初期の哲学者サルトルにとって大きな問題であったことは、『想像力の問題』や『情緒論素描』などで、繰り返しこの問題が論じられることからも見てとれる。ここでは、『想像力の問題』から、紹介しておこう。サルトルはブルーストを心理学と並べて論じながら、情感 (affective) に関して、「ブルーストとその弟子たちにとって、私の愛と、愛される人物とのつながりは、結局のところ、隣接の関係でしかない」と述べる。その上で、このような見解を、感情の一種の独我論と呼び、感情を、その対象や意味から切り離すためにそう考えてしまうのだと断定する。このことからわかるように、サルトルのブルースト批判は、

じつは、ある種の心理学、サルトルが主知主義的心理学と呼ぶものと関わっている。

この点がさらに明瞭に現れるのが、『存在と無』である。哲学書としては異例のことだが、『存在と無』にはじつに多くの作家の名前が現れる。そのうちでブルーストへの言及は十一回と、マルロー（七回）、ジイド（八回）を引き離し、群を抜いている。序論で、ブルーストの天才が例に挙げられたことは、すでに述べたとおりだ。その次には、やはり肯定的な文脈で、『対自存在』を論じた第二部の第二章「時間性」において、「心の間歇」がブルーストによって見事に描かれていると指摘している<sup>14</sup>。サルトルがきわめて批判的な文脈でブルーストを召喚するのは、そのすぐ後である。

そういうわけで、ブルーストは、主知主義的な分解によつて、心的な諸状態の時間的な契機のうち、それらの諸状態のあいだの合理的な因果性をつながり、たえず見出すとつとめる。(EN 216)

ところがサルトルによれば、そのような心理作用の記述によつては、私たちは、けっきょく心理について何も知ることはできない。サルトルは「スワンの恋」からの長い引用を行った後<sup>15</sup>、ブルーストの記述によつては、心理作用は理解できないと断言する。

この分析の結果はいかなるものであろうか。心的なものの不可解さは、果たして解消されただろうか。容易に見てとれることだが、このような恣意的な仕方では、大きい心的形式をより単純な要素に還元しても、かえって心的な対象が相互の間に保っている諸関係の魔術的な非合理性が目立つばかりである。(略)プルーストはそこに象徴的な「化学作用 (chimisme)」を構成しようとするが、彼が用いる化学的なイメージは、非合理的な動機と行動を隠すことしかできない。(EN 216)

このような批判の意図をよりよく理解するためには、『存在と無』において、サルトルがなによりも、意識の自発性を問題にしていることを思い起こす必要がある。言いかえると、ここでの賭け金は、意識の自由なのだ。私たちの心の状況は、なんらかの因果律によって一定に起こっているのではない。過去が未来を規定するのではない。心的持続においては、過去の状態は現在の状態に作用を及ぼすとしても、そこにあるのは、因果的な関係ではなく、ある種、魔術的で非合理的なもの、意識の自発性によるとサルトルは述べ、この作用を知的分析によって理解しうる因果性に還元しようとする主知主義的心理学は空しいと断定する。そして、プルーストの小説もまた、それに似ているとするのだ。サルトルは、「プルースト的な記述方法のもと

では、主知主義的な分析がつねにその限界を示している。つまり、主知主義的な分析は、全面的な非合理性の表面において、全面的な非合理性を根拠としてしか、その分解と分類の操作を行うことができない」(EN 211)とまで言う。観点を変えてみれば、ここではプルーストは完全に、主知主義的心理分析に対する批判のダシでしかないのだ<sup>16</sup>。

この態度は、『存在と無』の別の場所でも、現れる。第三部「対他関係」第二章「身体」においてである。サルトルはいわゆる「性格 (caractere)」というものが、他者にとっての認識のうちには少なく、自分自身の性格は認識できない、ということを確認したうえで、再びプルーストを持ち出すのである。サルトルによれば、意識そのものが、なんらかの性格を持っているのではない。意識が自らの性格を認識するとしたら、それは、他者の観点から出発して、反省的に自己を眺めるときだけであるということである。重要な箇所なので、少々長めに引用することにしてしよう。

プルーストの主人公は、直接的に捉えられるような性格を「持つていない」。彼は、自分を意識しているかぎりにおいて、まず、あらゆる人間に共通する一般的な諸反応、情念、情緒、思い出の出現順序などの「メカニズム」の総体として、自分の気持ちを打ち明ける。こうして誰もがそこに自分の姿を認めることができる。それらの反応は、心的



なもの一般的な「本性」に属するからだ。私たちが、ブルーストの主人公の性格を(たとえば、弱さ、受動性、恋愛と金銭との特殊な結びつき等)に関して)規定することができるのは、私たちが生の与件を解釈するからだ。与件に対して、外的な観点をとり、それらと比較し、そこから恒常的で客観的な諸関係を抽出しようと試みる。だが、それには、距離が必要である。読者が、普通の読書気分にはたつて、小説の主人公と同化しているかぎり、「マルセル」の性格は、読者には気づかれない。それどころか、マルセルの性格は、この水準においては、存在しない。それは、私が、自分と作者とをひとつに結びつけている共犯関係を断ち切る場合にしか現れない。つまり、この書物を腹心の友(confident)と見なすことをやめ、打ち明け話(confidance) *confiance* に言えば、記録と見なす場合のみなのだ。

EN 416

このようなブルーストの援用の仕方、恣意的のそしりを免れるものではないだろう。とはいえ、その一方で、サルトルはブルーストの描く世界がけつして還元主義一辺倒でないことも認めている。たとえば、第四部第二章第一節「実存的 정신分析」の章である。人間の欲望を、意識の投企(Projet)という観点から説明しようとするこの章において、サルトルは積極的な文脈でブルーストを引き合いに出す。

ブルーストはその先知主義的、分析的な傾向にもかかわらず、愛や嫉妬は、ひとりの女を所有したいというただそれだけの欲望に還元されるものではなく、その女を通して、世界全体を独占しようと目ざすものであることを示した。

EN 649

### 三 対他関係の特権的な形象としてのアルベルチヌ

しかし、サルトルがブルーストを援用する際の一番の焦点となるのは、なんといても他者との具体的な諸関係を論じるときである。その際にアルベルチヌの例が出てくるのは、想像にかたたくない。

たとえばブルーストの主人公は、愛人を自分の家に住ませせていて、一日のうちいつでも彼女に会い、彼女を所有することができるし、物質的にも彼女をまったく自分に依存させることができたのであるから、不安から解放されてよいはずだ。ところが、じつはそれどころか、彼は心配に苛まれている。マルセルがアルベルチヌの傍にるときでさえも、彼女の意識によって、彼女は、彼から逃れる。それゆえ、彼が休息を得ることができるのは、彼女が眠っているのを眺めているときだけなのだ。だとすれば、

愛とは「意識」を捕囚しようとすることだ。EN 434

捉えがたい他者の典型として、アルベルチヌスという形象が對他関係において、サルトルにおいて、きわめて重要な位置をもつことをこの文は示している。このくだりは、『存在と無』第三部「対他存在」第三章「他者との具体的な諸関係」の第一節「他者に対する第一の態度——愛、言語、マゾヒズム」に見られる。そこで、サルトルは、「まなざし」という理論的には双方向的である体験から出発して、私たちが具体的な他者をいかに所有という形で捉えようとするのかを様々な視点から検討する。サルトルによれば、人間存在が自由であるかぎり、他者も私と同様に自由なわけだが、愛とは、その他者の自由を私の自由のうちに絡め取ろうとする無益な試みにほかならない。というのも、他者の自由は、どうあっても私の手から逃れてしまうからである。だとすれば、愛とはどのようなものなのか。逃げる女性、つねに手の届かないところへとすり抜けていくアルベルチヌスという人物は、まさに他者の現象学においてエンブレマティックな存在なのである。

だとすれば、「他者の哲学者」であるエマニュエル・レヴィナスが、同様にアルベルチヌスに強い関心を示したのも当然であろう。ブルーストに関して、モノグラフィックな論考を書かなかつたサルトルとは異なり、レヴィナスには短いとはいえず、ブルーストに関する論考がある。それは、四七年に雑誌『デウ

カリオン』に発表された「ブルーストにおける他者」<sup>17</sup>だが、そこでレヴィナスは次のように述べている。

囚われの身であり、逃げ去っていくアルベルチヌスの物語は、空虚であると同時に尽きることのない他者の他者性への飽くなき好奇心から出発して、内面の生が出現することを語るものである。NP 121

このように、対他関係の具体的なイメージをやはり、「話者」とアルベルチヌスとの関係のうちに見出すレヴィナスは、一九〇六年生まれで、サルトルと一つ違いだから、まさに同時代人である。ただし、リトアニア生まれのレヴィナスがブルーストを読んだのは、一九二三年、ストラスブール大学に入学した後、モリス・ブランショの影響を受けてのことだと言われる。そして、とくにドイツ軍がパリを占拠し、一九四〇年から四五年まで捕虜になっていたころ、ブルーストを熱心に読んだようで、最近公刊された『捕囚手帳』、特に四二年の手帖2には、ブルーストに関するメモや抜き書きが集中して見られる<sup>18</sup>。

この短い論考で、レヴィナスはブルーストを心理学や社会学に還元してはならないことをまずは指摘し、両大戦間の読者たちが、ブルーストを読む際にもつばら、フロイトやベルクソンに比すべき心理学の巨匠として、あるいは、当時の風俗を風刺



的に描いた絵巻作者として捉えてきたことを批判する。このような文脈で、心理学的読解の代表として挙げられるのがサルトルだ。

ブルーストの分析は、たとえそれがリボを思い起こすものだとしても、——というか、サルトルがなんと言おうとも、それがリボを思い起こすことは稀だが——魂を刺激する棘である、自己と自己との間にある疎遠性(étrangeté)を表現している。NP 120

一九三八年にサルトルが言ったとされる「ブルーストの心理学だつて? そんなものは、ベルクソンの心理学ですらない、リボの心理学だ」(NP 118)の典故についてはいまだ特定できずにいるのだが<sup>19</sup>、サルトルは『想像力』をはじめ、いくつかの場所でもテオデュール・リボを明示的に引いて批判しているから、ブルーストと絡めてリボを引き合いに出した可能性は十分ありうることだ<sup>20</sup>。ブルーストは当時有名であったリボの著作を読んでいたが、それを単純に自らの小説手法に取り入れたわけでないことは言うまでもない<sup>21</sup>。サルトルもむろん、そのことは承知していたはずだ。それでは、レヴィナスの批判をどう読み取るべきだろうか。それは、なによりも、テース、リボ、ベルクソンなどの思想家に結びつけられがちなブルーストの心理分析をそれらから引き離し、それ自体として考察するという

ことであろう。言い換えれば、巷に溢れる俗流の心理学とは異なるものとしてブルーストの小説を読むべきである、というのがレヴィナスの主張の骨子である。

それでは、なぜブルーストを心理学と単純に比較してはならないのか。それは、レヴィナスによれば、『失われた時を求めて』において重要な点は、描かれる内的な出来事そのものではなく、むしろ「自我が内的出来事を捉え、それによって衝撃を受けるあり方」(NP 120)のほうだからであり、さらに言えば、その際に、自我は、「出来事にあたかも他人のうちにいてであるかのように」出会うからである。かくして、レヴィナスは、サルトルがブルーストにおいて心理学的として糾弾した心理描写を別の角度から考察することを提唱する。

ブルーストの心理学のうちに経験主義的心理学の手法を見出すことは、ブルーストの作品の魅力を破壊することではなく、作用させることである。というのも、ブルーストの作品にあつては、心理学の理論は手段にすぎないからだ。NP 188

このようにレヴィナスは、『失われた時を求めて』に見られる心理学使用を擁護するのだが、ブルーストにおいて心理学の理論が手段にすぎないとはどういう意味だろうか。レヴィナスは、ブルーストにおいては、定義された現実がその定義を逃れ

ていく点に注目する。ブルースト作品は、ある種の両義性、あるいは二重化作用を表している。ブルーストの小説ではつねにあらゆる事が可能であり、「絶対的な非決定性」がある。つまり、「ある行為は、予見不可能な意図を秘めた「背面行為」によって裏打ちされ、事物は、思いもよらない展望と次元を有した「背面事物」によって裏打ちされているのであり、これこそが、ブルーストの世界における真の内面化なのだ」(NP. 199)。同時に、ここでは、自我もまた、常に二重化している点にレヴィナスは着目する。つまり、ブルースト的反省においては、自我とその状態とのずれがある。そして、このある種の屈折によって強いられるこの反省は、内面的生そのものを浮き彫りにする、というのがレヴィナスの主張である。

あたかも、もう一人の自分がたえず自分を二重化しているかのようなのだ。比類なき友情によって、と同時に冷徹な疎遠性(étrangéité)によって、それは起る。生は、この疎遠性を乗り越えようと努めるのだが。ブルーストにおける神秘は、他者の神秘に他ならない。

NP. 120

他者の神秘。これこそが、レヴィナスがブルーストの小説世界に読み取るものである。他者とは、けっして自己に回収されないもののことだということは、サルトルもまた指摘したこ

とだが、レヴィナスによれば、そのことだけが重要なわけではない。ブルーストの作品が示すことは、他者の他者性に打ち当たることによって、私自身もまた私にとって他者であることが、理解不能な眼前の他者を通して啓示されるのである。このことによって、愛ということの意味すらも変化することになる、とレヴィナスは考える。

愛が他者との融合であるとするなら、愛が他人の申し分のない美点を前にしたときの恍惚であるとするなら、あるいはまた心穏やかに何かを所有することであるとすれば、マルセルはアルベルチヌを愛してはいない。(略)愛ならざるものこそが愛であり、愛であり、捉えることができ、ないものとの闘いが所有であり、アルベルチヌの不在、彼女の現前なのだ。NP. 123

この指摘は、視点を変えて言えば、孤独、隔てられた恋愛ということへの注目、言いかえれば、コミュニケーションの不可可能性(incommunicabilité)といってもよい。その意味で、ブルーストによって、孤独は新たな意味を獲得した、とレヴィナスは考える。なぜなら、ブルーストの世界において、孤独こそが、コミュニケーションの不可能性こそが、コミュニケーションへと反転するからである。

かくして、レヴィナスは、『失われた時を求めて』のうちに、

二重の意味で、完全な他者性を読み込むのである。レヴィナスによれば、ブルーストが優れて社会的なものの詩人であるとするれば、それは彼が風俗を描いた画家だからではなく、他者関係の根本を捉えたからなのだ——こういった指摘は、すでに『捕囚手帳』において、素描されていたことであるが<sup>22</sup>、レヴィナスは論文においてそれをより明瞭に展開している——レヴィナスによれば、ブルーストの最も深い教えは次の点にある。つまり、永遠に他なるものに留まり続ける何かとの関係のうちに、そして、不在で神秘的な他者との関係のうちに、現実を置くこと、そしてこのような関係を、「自我」の内面性のうちにさえ見出すこと、「あるものはあり、ないものはない」という、変化ではなく連続性を認めるバルメニデス的な態度と決定的に手を切るような弁証法を始めたことにある(ND 123)。

このように見てくると、二人の哲学者にとつて、ブルーストの問題が何よりも、他者関係と深く関わっていたことがわかる。他者の問題がきわめて重要な主題であった現象学の哲学者たちにとつて、誰もが理解しやすい形での具体例がブルーストの小説だったのであり、さらに言えば、ブルーストはなによりも、アルベルチヌスという形象のもとに、自己と他者という切り口から読まれたのである<sup>23</sup>。

## 五 他者を通して顕現する人間の独自⇨普遍性

前節で検討したレヴィナスの論証はきわめて説得力に富み、これだけを読むと、サルトルはブルーストの重要な点を見落としたと結論したくなるが、果たしてそうであろうか。レヴィナスのサルトル批判にもかかわらず、じつは、他者の他者性、コミュニケーションの不可能性、自我の二重化は、サルトル自身の主要なテーマでもあり、彼自身が哲学と小説において飽くことなく追求してきたことでもあった。さらに言えば、『存在と無』で展開される人間存在の根本的特徴とは、まさにレヴィナスが述べたような、他者の絶対性であり、それと同時に、自己の自己に対する他者性であったのだ。したがって、現象学的アプローチによって炙り出される『失われた時を求めて』の自我論および他者論に関しては、二人の哲学者の間に微妙な相違はあるにせよ、論に関する基本的なスタンスには通底するものがあるのだというべきであろう。

とはいえ、サルトルが、ブルーストの小説がこのような作用を持つていることを公には認めようとしなかったことも確かである。その一方で、小説の実践においては、サルトルはブルーストから、このような他者体験を肌にしひりひりと感じる形で描く仕方を受け継いだように思われる。そこで、もう一度、サルトルに戻って、残された紙幅で、この問題を同性愛というテーマを通して見ておこう。

サルトルは、戦後に発表した長篇小説『自由への道』にダニエル・セラノという同性愛者を登場させている。全篇を通じてきわめて重要な役割を演じる、ほとんど副主人公級の人物である<sup>24</sup>。精緻な論証ぬきで、結論だけ言えば、このダニエルという人物の造形に際してシャルリュスが強く意識されていたはずだと私は考えている。少なくとも、シャルリュスという人物の存在感にサルトルが圧倒されたにちがいないことに關しては、彼自身の証言がある<sup>25</sup>。さて、このダニエルには、モデルがいる。ル・アーヴルの高校で同僚であったズオロという同性愛者だ。三九年の夏休みをサルトルとポーヴォワールは、ズオロも含めた何人かで南仏で過ごした。サルトルはある女友だち（ヴェドリーヌ）宛の手紙でこのヴァカンスのことを細かに語っているが、そこでのズオロの行動を説明する際に、シャルリュスとモレルの関係が引かれていることも傍証としてあげることができよう<sup>26</sup>。だが、問題は、主人公マチウ・ドゥラリュに真っ向から対立する人物として、なぜサルトルが同性愛者を出してきたのかである。小説に彩りを添えるのにお詠えの人物のモデルになる絶好の人物が身近にいたと言うだけでは説明はつくまい。

私の仮説はこうだ。ダニエルは、当時の男色者のステレオタイプのように性格づけられている。すなわち、キリスト教世界における墮天使、美的なものへの渴望、女嫌い（その一方で表面的な女性に対する優しい態度）、男性性の崇拜、母性への憧

れと忌避、ドイツびいき、虚言癖、ナルシズム、悪魔的存在、等々<sup>27</sup>。『存在と無』の自己欺瞞の部分で述べられたように<sup>28</sup>、同性愛者は、自らのあり方をつねに他者に対して隠さなければならぬ。そして、自分自身にも同性愛者であることを隠すという自己欺瞞的あり方に陥ることもあるとされる。だが、社会に対して、常に本体の自己とは別な人間を演じるといふありかたのために、自分の二重性を鋭く感じざるを得ない存在でもあるのだ。自らの誠実性（それは全きの自己同一性だ）をまったく疑わない主人公、哲学教師のマチウに対して、自らに対しても、他者に対しても誠実でないダニエルが、自分がゲイであることをカミングアウトしたとき、二人の關係に驚くべき逆転が起こる。自己が一枚岩的な自己であると信じ込んでいるマチウに対して、自分の本質的な二重性を意識するダニエルのほうが、存在論的に決定的に優位に立つのである。そして、マチウは、そして、私たち読者もまた、まさにこの自己と自己の間にある深淵を突きつけられることになるのだ。

サルトルが同性愛者ダニエルを登場させる理由はそれだけに留まらないであろう。ここでもまた、結論だけ言ってしまう、男・女をはじめとする、さまざまな明瞭な二項対立的構図を崩す者として、ダニエルは小説において重要な役割を演じるのである。そして、それこそが、作家サルトルがブルーストから学んだこと、あえて告白はしていないが、重要な教えではなかったであろうか。

サルトルは、同性愛者としてのブルーストに何度か言及しているが、たとえば、『聖ジュネ』には、いま指摘した問題系はつきりと現れている。「ブルジョワ男色者のドラマとは、じつは、非順応主義者のドラマなのだ<sup>29</sup>」と指摘し、それぞれの同性愛者が、それぞれの仕方での社会的な慣習と折り合いを付けようとするのだとしたりうえで、サルトルは言う。

不可知論者であるブルーストは、彼の責任のなさを心理的決定論の上に基礎づけているが、この心理的決定論は、立場の必要から彼が発明し、完成したものである。ブルーストの分析は、特に、彼の「悪徳」と関係のない行為や感情を対象にするときでも、弁護論なのだ。(略) 正常な人間などいない。シャルリュスの男色は彼を苦しめるガンであるが、同性愛者であるスワンの嫉妬もまた、同じく破壊的なのである。SG 215

先の引用では、non-conformisteを「非順応主義者」と取りあえず訳したが、この言葉が「性的倒錯者」の婉曲表現であることを想い出せば、ここでは、やや同語反復的ではあるが、まさに、社会が課する価値と自分が掲げる価値の不一致、さらには、自分自身との不一致こそが問題になっていることがわかる。ここでもサルトルは、一見ブルーストの普遍主義に対して、個々の状況や個別性の方に重点を置くべきだと主張しているよ

うに見えるが、重要なのはその点ではなく、むしろ、同性愛というトポスに、独自と普遍を結びつける鍵を見出していることではあるまいか。二項対立的思考法ばかりが指摘されるサルトルだが、同性愛というきわめて両義的なトポスについて、彼ほど正面から論じた哲学者はいない。

このように見てくると、最初に紹介した『現代』誌創刊の辞におけるブルースト批判は裏返しでの賛辞とも見てとれる。

男色者として、ブルーストは、スワンのオデットに対する愛を描写しようとした際に、自らの同性愛の経験を用いることができると考えた。ブルジョワである彼は、金と余暇のあるブルジョワが困い者に対してもつ感情を恋愛の原型として示している。つまり、彼は普遍的情念パッションの存在を信じているのであり、この情念のあり方は、それを感じる個人の性の特徴や社会条件、個人が生きる国や時代を変えてもさほど変わらないとするのだ<sup>30</sup>。s. 1720

このように、サルトルは作家ブルーストが前提とする普遍性を指摘した。しかし、ブルーストが普遍的なものに単純に還元されるような情念を語ったわけではないことを私たちは知っている。彼はむしろ、それぞれ独自の情念にまさに独自性を通して普遍的なものの構築を讀者のうちに呼びかけるのであり、引き起こすのである。じつさい、私たちがブルーストを読んでそ

ここに喜びを見出すとすれば、まさに、そこにはあらかじめ想定されたような安易な普遍性ではなく、独自性を通じた普遍性の追求があるからではあるまいか<sup>30</sup>。そして、じつは、この普遍可能な独自性の追求こそ、サルトルの実存主義の真髄でもあるのだ。その意味で、ブルースト作品は、サルトル自身の目ざしたものと見事に共鳴していると思われるのである。

註

- 1 Jean-Paul Sartre, *Situations, II*, Gallimard, 1948, p. 20. 以下 *Sit. II* と略記。
- 2 ブルーストをこきおろすのはサルトルの専売特許ではない。ブルトンもまた、『シユルレアリスム宣言』において、ブルーストを過剰な「分析欲」のために未知のもの魅力を損なっている作家として挙げているし、セリーヌも『夜の果てへの旅』において、ブルーストのことを上流社会に溺れた「亡霊みたいな奴」と酷評している。
- 3 *L'Être et le néant*, Gallimard, 1943, éd. 1973, coll. «TEL», p. 12. 以下 EN と略記。
- 4 鈴木道彦が『嘔吐』の解説でも簡潔にして要を得た説明をしているが、サルトルとブルーストに関する数多くある研究の中から主なものを挙げておこう。Brecer, Roland, *Singularité et sujet. Une lecture phénoménologique de Proust*, Grenoble, Millon, 2000. Bucknall, Barbara J., «Lecteurs

- de nous-mêmes», in *Bulletin de la Société des Amis de Marcel Proust et des Amis de Combray*, n° 29, 1979, pp. 47-61. Deguy, Jacques, «Sartre lecteur de Proust», *Lectures de Sartre*, textes réunis et présentés par Claude Burgelin, Presses Universitaires de Lyon, 1986. Ji, Young-Rae, «Sartre, admirateur secret de Proust», *L'Esprit Créateur*, Volume 46, Number 4, Winter 2006. Newman-Gordon, Pauline, «Sartre lecteur de Proust ou le paradoxe de *La Nausée*», *Bulletin de la Société des Amis de Marcel Proust et des Amis de Combray*, n° 29, 1979, pp. 103-114. Id., «Sartre lecteur de Proust ou le style de *La Nausée*», *id.*, n° 31, 1981, pp. 323-330.
- 5 *Écrits de jeunesse*, texte établi par M. Contat et M. Rybalka, Gallimard, 1990, p. 480. 下では EJ と略記。
  - 6 「そのころ、ぼくらは真面目なものを讀みはじめたんだ。たとえばグリユハールはブルーストを讀んでいて、ぼくは高校三年のときにブルーストの作品を知って、すっかり魅了された。」Entretiens avec Jean-Paul Sartre août-septembre 1974, dans de Beauvoir, Simone, *La Cérémonie des adieux*, Gallimard, 1981, p. 167. 「サルトルとの対話」『別れの儀式』所収、人文書院、一六五頁。
  - 7 EJ 480-481.
  - 8 とはいえ、三七年の「自我の超越」では、まだ辛辣ではない。「憎しみと道徳や毛熱などとの闘争が、あたかも物理的な力の相剋のように描き出され、ついにはバルザックや大部分の作家たち（ときにはブルーストでもさえ）は、状態にたいして力の独立作用の原理を適用するまでになっっているではないか」



La Transcendance de l'Ego, esquisse d'une description

phénoménologique, introduction, notes et appendices par

Sylvie Le Bon, Vrin, 1978, p. 50. また「四四年のボンジュ論

でも」画家に関するくだりで「エルスチールへの言及が見ら

れるなど、サルトルのブルーストへの愛着の名残りは見られる。

9 とはいえ、幽閉のテーマはジイド『ボワティエの幽閉者』

一九三〇)にも見られることを考えれば、より広い視点から

考えるべきだと思うされる。

10 La Transcendance de l'Ego, op.cit., p.13.

11 Situations, I, Gallimard, 1947, rééd. 1993, coll. « Folio

essais », p.32. 以下 Sit. I と略記。

12 一方、時間性に関して「フォークナー論でサルトルは言う。

「ブルーストの主人公たちはけつして何事も企てない。たし

かに彼らは予見するが、彼らの予見は彼ら自身にへばりつ

いて、橋のように現在の彼方へ架けられることができな

い。それは現実がもたらす夢想だ。アルベルチヌが現れても、そ

れは待たれていた女ではなく、期待は取るに足りない、瞬間

に限られた、小さな心の動揺以外の何もなかった」Sit.

172.

13 L'imaginaire, psychologie phénoménologique de l'imagina-

tion, Gallimard, p.136-137.

14 「現に生きている愛の場合でも、間歌的な時期があるので

あって、その間、自分が愛していることを知っていないがら

それをまったく感じていない。このような「心の間歌」はブル

ーストによって見事に描かれた」EN211

15 引用されているのは、スワンがオデットに対する自らの嫉

妬を振り返って見られるようになったときのことである。

16 サルトルは、第四部でも再び同じような指摘を行っている。

「後には純粹に心理的な一種の決定論の構築が試みられる。

たとえば「ブルーストが嫉妬やスノビズムについて試みたあ

の主知主義的な分析は、情念の「メカニズム」に関するこの

ような考えを、例証する役割を果たすことであろう」EN485

17 この論考は、後に「固有名」に再録された。\*Autre dans

Proust\*, Noms propres, Fata Morgana, 1976. 以下 NP と略記。

18 Œuvres complètes, tome 1 : Carnets de captivité, Grasset/

Ince, 2009. 内容から見ると、そのメモが、後に「ブルースト

における他者」へと発展したと見ることができ<sup>406</sup>。

19 三八年の発表作といえは「嘔吐」、短編小説「部屋」「水入

らず」「フォークナー論」「トス・パソス論」「糧」「ニザンの『陰

謀』のほか、いくつかのインタビューであるが、これらのう

ちには、この言葉は見当たらなかった。

20 一方、実際にブルーストとリボを結びつけた例がボーヴォ

ールにはある。「リボの弟子としてのブルーストは退屈で、

私たちに何も教えない。一方、真正の小説家であるブルース

トは真理を発見した。そして、同時代の理論家の誰一人と

してその真理の抽象的相当物を提示しなかった」と『現代』

誌に発表された「文学と形而上学」で述べられている。Simone

de Beauvoir, « Littérature et métaphysique », in Les Temps

Modernes, N°4, 1946, p.1158. とはさへ「ボーヴォールは

日本で行った講演でブルーストのことを「文学作品をすぐれ

て間主体的な場と見なした作家として評価する発言をしてい

る。\*Mon expérience d'écrivain », in Les écrits de Simone

de Beauvoir, Gallimard, 1979, p.455-456.

21 ブルーストとリボに関しては次の論文に詳しく。Edward

Bizub, «Proust et Ribot : L'Imagination créatrice», *Bulletin de la Société des Amis de Marcel Proust (BMP)* N°58, 2008, p.49-56. また、以下の書でもブルーストと当時の心理学との関係は詳述されている。Luc Fraisse, *Téléclisme philosophique de Marcel Proust*, Presses de l'université Paris-Sorbonne, 20013, pp.847-881.

22 「ブルーストにおける純粹に社会的なものの詩。その利点は「心理学」ではなく、社会的な者という主題による。因われの女アルベルチヌの物語全体は、他者との関係の物語である。アルベルチヌと「その嘘は、他者のはかなさそのものでないとしたらば、その無からなる現実でない」とすれば、その不在からなる現前でない」とすれば、捉えがたきものとの格闘でないとするれば何なのか。そして、その傍らに——眠るアルベルチヌの、植物的アルベルチヌの前の静けさ」*Œuvres complètes, tome 1 : Carnets de captivité, Grasset/Imec, 2009, p.72* (『レヴィナス著作集』三浦直希ほか訳、法政大学出版局、二〇一四年、八六頁)

23 メルロ＝ポンティもまた、ブルーストに強く惹かれた哲学者の一人である。彼はコレージュ・ド・フランスでの講義をはじめ、「眼と精神」、未完に終わった「見えるものと見えざるもの」にいたるまで、しばしばブルーストに言及した。二十世紀フランス思想家によるブルースト解釈に関しては、Anne Simon, «La philosophie contemporaine, mémoire de Proust ?», in *Proust, la mémoire et la littérature, sous la direction d'Antoine Compagnon, Odile Jacob, 2009*が簡潔な見取り図を描いている。

24 同性愛者ではないサルトルがなぜ、かくも同性愛に関心を

持ち、哲学書においても小説においても同性愛の問題を扱うのかについては、すでに別の場所で論じたことがあるので、以下の論考を参照していただければ幸いです。澤田直「サルトルにおける同性愛の表象と役割」別冊 水声通信 セクシュアリティ 水声社、二〇一二年。

25 映画「サルトル」の中で、サルトルは言っている。「我々はブルーストを読み、登場人物についてあなたも実在の人物であるかのように語ったりした。「シャルリュス氏は他にいったい何をしただろうか。ああ、そう彼はこんなこともした」といった具合に」。Sartre, *un film réalisé par A. Astruc et M. Conat, Gallimard, 1977, p.30.*

26 「こうした率直な称賛の気持ちも同性愛者においてはしばしば愛の始まりになる。支配への願望よりも一種の騙されやすさによる崇拜への願望のほうが強い。ブルーストがこのことをシャルリュス氏とモレルに関してはつきりと示したことを私はよく覚えてくる」*Lettres au Gastor et à quelques autres, 1926-1939, t.1, Gallimard, 1983, p.258-259.*

27 ダニエルは、マルセルから「大天使」と呼ばれているが、これも、シャルリュスが、大天使ミカエルを守護聖人と仰いだことと無縁ではないかもしれない。

28 「同性愛者は、しばしば耐えがたい罪悪感をもっており、彼の存在全体がこの罪悪感との関係において規定されている。彼は自己欺瞞的である、というふうにわれわれは推測しがちである。事実、こういうった人は、しばしば自分の同性愛的傾向を認め、自分の犯した特異な過失の一つ一つを告白しながらも、自分を「男色」と見なすことを極力拒否するからである。」

EN 98

29 *Saint Genet. comédien et martyr*, Gallimard, 1952, p.

215. 以下 SG と略記。

30 あるいは、アガンベンが言う意味でのパラダイムのような  
ものである。ジョルジョ・アガンベン『事物のしるし 方  
法について』（岡田温司・岡本源太訳、筑摩書房）参照。

なお、本研究は日本学術振興会科研費二四五二〇三七一の助成を  
受けたことをここに記し、謝意を表します。